

国有林の巨木を活用した地域振興への貢献
～白神山地のシンボル「マザーツリー」の枯死から
後継木の選定・発表まで～

津軽森林管理署	発表者	主事	武田 航史
			猪股 龍希
	チーム員	森林官補	安藤 宏明
	チームリーダー	森林技術指導官	吉川 浩人
	アドバイザー	署長	佐藤 智一

1 はじめに

(1) マザーツリーの沿革について

白神山地は青森県南西部と秋田県北西部にまたがる、約 13 万 ha に及ぶ広大な山地帯の総称であり、このうち世界最大級の原生的なブナ林が 1993 年（平成 5 年）に世界自然遺産に登録されました。「マザーツリー」は遺産地域の北東、県道岩崎西目屋弘前線の西目屋村と鱒ヶ沢町との境、津軽峠付近にあるブナの巨木で、2000 年頃に名付けられ、当署による遊歩道、案内標識等の整備や、峠に駐車場・トイレが整備されたこともあって徐々に来訪者が増え、著名になりました（写真 1）。

なお、マザーツリーの所在地は「日本美しの森お薦め国有林」にも選定されているレクリエーションの森、「白神山地・暗門の滝自然観察教育林」の区域内です。

(2) マザーツリーの枯死について

白神山地の象徴的な存在として親しまれてきた「マザーツリー」は樹勢の衰えがみられ、民間ボランティアによる土壌改良などの策が講じられましたが、2018 年 9 月の台風により幹が折損してしまいました。その後、2023 年急激な樹勢の衰えがみられ、樹木医による診断の結果、2024 年春の芽吹きがなく「枯死」と診断されました。これをプレスリリースしたところ、多くのメディアで取り上げられ、大きな反響がありました（写真 2）。



写真1 2018年撮影の
「マザーツリー」



写真2 枯死発表時の
「マザーツリー」

2 後継シンボルツリーの選定について

(1) 西目屋村への協力依頼

「マザーツリー」は国有林内にあったひとときわ大きいブナの巨木をシンボルツリーとして観光コンテンツ化を図ったものでした。枯死したことを受け、国有林として引き続き地域振興に寄与するためには新たなシンボルツリーの選定が必要と考えました。

しかし、署だけで選定しても地元の理解や協力は得られません。そこでこの考えを地元の西目屋村へ持ちかけたところ、村からは今後の観光資源となるよう、是非とも後継のシンボルツリーを選定してほしいとの回答がありました。

(2) 後継シンボルツリーを選定するにあたり重視した点

後継シンボルツリーを選定するにあたり重視した点は、「マザーツリー」に準ずるブナの巨木であること、樹勢の衰えがみられないこと、アクセスが良いことの三つです。これらの条件を満たす場所として、マザーツリーからも近い、遊歩道「ぶな巨木ふれあいの径」一帯のブナから選定することとしました。こちらも冒頭で述べたレクリエーションの森の区域内です。

地元のガイド団体等からも情報収集しつつ、8月までに調査し、選定しました。

(3) 後継シンボルツリーの呼称募集

後継シンボルツリーの呼称については、マザーツリー枯死発表時の反響の大きさを踏まえ一般から公募することとしました。実際に使用したポスターには、推定樹齢は400年に対して300年など、マザーツリーと比較した数値も掲載した一方、呼称未定のまま訪れられないよう具体的場所は図示せず、非公表としました(写真3)。募集方法としては二次元コードからの入力フォームによる電子メールとチラシを兼ねた応募用紙で、村の協力を得て村内3箇所の観光施設に応募箱を設置することとしました。

また、西目屋小学校に高学年児童による応募を依頼したところ、児童がイメージ

を自由に書き込むホワイトボードを昇降口に用意するなど学校を挙げて取り組んでいただきました（写真4）。応募総数は192件にのぼりました。



写真3 使用したポスター



写真4 西目屋小学校昇降口のホワイトボード

3 後継シンボルツリーの呼称決定・発表について

(1) 呼称決定について

200件近い応募を元に村長と当署署長とで協議した結果、呼称は「白神いざないツリー」となりました（写真5）。「いざない」は招く、さそうという意味の名詞形であり、このシンボルツリーをきっかけに白神山地を訪れてもらいたいという願いが込められています。なお、マザーツリーの後継であることが分かるよう、「マザーツリー後継」と“冠”を付けて表記することとしました。

また、外国人観光客に地元ガイド等が説明しやすいよう英語表記も設けました。



写真5 白神いざないツリー

（英語表記：Shirakami Welcome Tree）

(2) 呼称決定にあたって重視したポイント

今回の後継シンボルツリーの呼称を決定するにあたって重視したポイントは、①親しみやすさ・呼びやすさ、②候補木の姿を的確に表現しているか、③白神山地のイメージに合致しているか、④既に他の呼称として使用されていないものであるかという4点で、これらを総合的に判断しました。

西目屋小学校4年生の児童が応募してくれた「いざないツリー」を基に「白神」を追加し、「白神いざないツリー」としました。

(3) 呼称発表について

10月下旬に西目屋村内の観光施設で「白神山地・暗門の滝森林環境整備推進協議会」を開き、後継シンボルツリーの呼称を発表しました（写真6）。この協議会は、

冒頭述べたレクリエーションの森の環境保全事業等を行う地域関係者の集合体で、西目屋村長が会長です。

会議終了後には、協議会出席者と報道機関の方々を現地まで案内し、取材対応を行ったところ、夕方の県内テレビにおいてトップニュースで放送されるなど注目度の高さが窺われ、大きな PR 効果が得られました（写真 7）。



写真 6 呼称を発表



写真 7 現地にて、いざないツリーをお披露目

（４）ゴールから逆算したスケジュール管理・メディア戦略

ゴールから逆算したスケジュール管理・メディア戦略



図 1 呼称発表までのスケジュール

呼称の発表・お披露目はアクセス道の冬季閉鎖や、多くの来訪者が期待される黄葉シーズン前にするなど日程を逆算してスケジュール管理を行いました。そのために必要な呼称の公募期間や〆切後の選定期間を概ね 1 カ月ずつに設定し、後継シン

ボルツリーの選定は8月までに行うこととしました。なお、マザーツリー枯死の発表もアクセス道の冬季閉鎖が解除される前に行い、一般の観光客や報道機関が入り込むよりも先に情報発信しました。

今回、3回にわたってプレスリリース・発表しましたが、県内全テレビ局の夕方のローカルニュース番組で多くがトップで報じられるなど、節目節目での積極的な情報発信が功を奏した形です（図1）。

4 今後の取組について

新たなシンボルツリー発表の情報発信は一定の効果がありましたが、「白神いざないツリー」が「マザーツリー」のように知名度を上げるには、今後多くの関係者による協力・連携が不可欠です。

当署は、木の根の踏圧防止のため、迂回歩道を整備し、暫定的な案内サインを設置しました。恒久的な案内看板等は令和7年度整備予定です。協議会に出席された関係機関の方々には、各機関作成の案内マップ等への反映と、積極的なPRをお願いしました。ガイドツアーなどでは当面の間は立ち枯れている「マザーツリー」と一緒に活用できるのではないかと考えています。

全国各地で巨木が地域のシンボルとして親しまれる一方、それが衰弱したり枯れたりした場合の対応は様々です。白神山地では、来訪者が強くイメージを持つブナの巨木をシンボルツリーとして国有林内で継続的に見出すことで地域振興への貢献を図りました。

今後も村をはじめ地元の関係機関と協力・連携し、地域の森林サービス産業のコンテンツの一つとして育て上げていきたいと考えています。